

コリント人への手紙第一3章 「派閥争いの愚かさ」

1A 肉に属する人 1-3

2A 神の奉仕者 4-9

1B 成長させる神 4-6

2B 神の協働者 7-9

3A 神の建物 10-18

1B 土台なるイエス・キリスト 10-11

2B 試される各人の働き 12-15

3B 御霊の宿られる宮 16-17

4A キリストにある特権 18-23

1B この世の知恵の愚かさ 18-20

2B すべてはあなたのもの 21-23

本文

コリント人への手紙第一 3 章を開いてください。パウロは、手紙を挨拶から始めて、そこから、クロエの家の者から聞かされた問題、つまり、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」というような派閥争いが起こっていることについての問題を取り上げています。1 章から 2 章にかけて、十字架につけられたキリストにこそ、神の力がああり、また神の知恵があることを述べました。そして 3 章では、真っ直ぐに派閥を作っていることの問題をまっすぐに取り上げます。1 章と 2 章で、問題を語るために土台作りをして、それから問題そのものに直球を投げて指摘しています。

1A 肉に属する人 1-3

¹ 兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語るができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。

2 章の終わりに、十字架につけられたキリストにある神の知恵は、神の御霊によって初めてその奥義が知らされていることを述べていました。キリストを信じて御霊が与えられたからこそ、そういったことをすべて判断できるけれども、生まれながらの人は愚かにしか見えません。御霊が与えられていないからです。ところが、コリントの人たちは、信じて御霊が与えられているはずなのに、派閥争いをしているということは、生まれながらの人たちと何ら変わらないことをしているではないか？と問いかけています。

パウロは彼らを「兄弟たち」と呼んでいますし、「キリストにある幼子」と呼んでいますから、あな

たがたは救われていないという話をしていません。けれども、救われる前と同じことを、救われたはずの人たちがしているのは何か？それを、「肉に属する人」とパウロは呼んでいます。

² 私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。

先週の礼拝で詳しくお話ししましたが、思い出してください。キリストにある幼子というのは、キリストを信じて救われて、そこから神の恵みによって成長するという霊的原則があるからです。教会が、キリストの身丈にまで成長することがエペソ 4 章に書かれています。イエス様が、種蒔きの喩えで、良い土地に落ちる種は、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶと言われましたし、弟子たちに対して、出て行って実を結び、その実が残るようになるため、と言われました。私たちは、神の恵みによって、信仰を通して救われましたが、その恵みの中に留まるという営みが必要です。

その成長を、パウロは、固い食物に喩えて話しています。みことばを聞いて、それを咀嚼して、保っていくということをする人が、固い食物を食べることができます。イエス様が、実を結ぶ良い土地の喩えでこう語られました。「ルカ 8:15 彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」キリスト者の歩みって、このようにとても地道ですね。けれども、この歩みを始めることもなく、時だけが過ぎていくと、知識は増えていきますが、実質がない。実が結ばれていないということがあります。

³ あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

彼らがなぜ、まだ肉の人かというと、世の中では常である妬みや争いが彼らの間にあるからです。「ただの人」とありますが、いかにも高尚なこと、霊的に見えるようなことを語っているようで、実は世の中で起こっている醜いことをやっているにしか過ぎない、ということです。

2A 神の奉仕者 4-9

そこで、彼らが派閥争いをしている中身に入っていきます。

1B 成長させる神 4-6

⁴ ある人は「私はパウロにつく」と言い、別の人は「私はアポロに」と言っているのであれば、あなたがたは、ただの人ではありませんか。⁵ アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。⁶ 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

パウロは、いくつかの党派のうち、アポロと自分を例に挙げていきます。アポロとパウロは、それぞれの宣教の場に入れ替わりました。エペソとコリントです。エペソでは、アポロが先に来て福音を伝え、その後でパウロが来て教会を建て上げました。コリントはその逆で、パウロが福音を伝え、教会が出来上がりましたが、その後でアポロがやって来て、教会を強めていったのです。ですから、コリントにおいてはパウロが植えて、アポロが水を注いだということです。

コリントの文化では、教師となっている知者にこそ知恵の源があり、だから誰々派として、その人についていくことが大事になりました。けれども、教会は違います。教師はあくまでも、「奉仕者」です。奉仕をしている人に源などありません。神ご自身が源です。ですから、その神によって、それぞれが命じられたことを行っているのであり、その奉仕者に源があるごとく党派を作ること自体が、無意味です。ここで、パウロが「しかし、成長させたのは神です。」と語っています。パウロが手紙の挨拶で、教会を「コリントにある神の教会(1:2)」と語っているところが味噌です。教会に対して所属意識を持つことはとても大切ですが、それは「神がこの教会に召してくださっている」という、神とのつながりの中で所属意識を持つのです。

このことについて、律儀な人であればむしろ陥ってしまう過ちでしょう。私も信仰をもって間もない時はこの傾向が強かったです。つまり、ある人たちを通して、自分は信仰を持つことができ、救われました。けれども、また別の教会の人々から、聖霊の働きについてとても大切なことを学びました。それで、その時に、通っている教会に対して批判的になっていきました。教えていないからです。けれども、さらに聖書を神のことばと信じ、かつ聖霊の働きを認めているカルバリーチャペルに導かれ、それ以来、落ち着いています。

そこで私は、その前の二つの教会の流れについて、批判的になっているでしょうか？いいえ、救われるための福音を語ってくれた教会が私には必要だったのです。いわば、信仰を植えてくれた教会です。次に、聖霊の力について強く語ってくれた人々も必要だったのです。水を注いでくれた教会です。そして、今は聖書と聖霊のバランスについて教えてくれているカルバリーチャペルに導かれたのです。植えて水が注がれたところに、剪定してくれている教会と言ったらよいでしょうか！

しかし私にとって、すべてが神の導きの中で行われたことであって、神がそのようにして私を成長させてくださったのです。たまたまカルバリーチャペルという教会の群れにいますが、それは神の召しによっているわけであって、それ以上でもそれ以下でもありません。どちらが正しく、間違っているかではないのです。教会は徹頭徹尾、神中心であり、他の誰もが主役ではありません。

みなさんのご経験の中で、例えばカルバリーチャペルでの全体の大会を思い出してみましょ。それぞれの教会が集まりますが、牧者たちは個性が強いですね！語り口はまるで違います。教会にも特色があります。けれども、何か分からないけれども、同じことしか語っていない。一つなんだ

ということを実感するのではないのでしょうか？神がおられる、ということです。さらに、私たちがカルバリーチャペルから離れて、教派を超えた大会に参加したら、もっとよく分かると思います。例えば過去に、フランクリン・グラハムによる伝道大会がありました。集まってきた教会は、本当にそれぞれ違います。けれども、イエス・キリストこそが道であり、真理であり、命である。この方が主であられるということで、一致がありました。

2B 神の協働者 7-9

⁷ ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。⁸ 植える者と水を注ぐ者は一つとなって働き、それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受けるのです。⁹ 私たちは神のために働く同労者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

大切なのは神なんですね。次に、奉仕者たちの働きについてパウロは焦点を当てます。ここに、「植える者と水を注ぐ者は一つとなって働き」とありますが、直訳は「植える者と水を注ぐ者は一つであり」となっています。パウロとアポロ、それぞれが自分たちは主にあって一つにされていることは、あまりにも分かっています。ペテロもそうでした。第二の手紙で、「愛する、私たちの兄弟パウロ」と呼んでいます(3:15)。ガラテヤ書には、ペテロはユダヤ人に対する使徒で、パウロは異邦人と言っていますが、信じている福音は一つであり、ユダヤ人が割礼のことで異邦人が受けなければいけないという議論においても、ペテロはパウロの宣べ伝えていた恵みの福音を擁護しました。それぞれ異なる召しがあり、働きがありますが、自分たちはむしろ、神のために働く奉仕者として一つだったのです。ところが問題は、表面的なところで、表面的な違いで仲互いを、それぞれの奉仕の恩恵を受けていた人々の間で起こっていたのです。

そして次に大事なのが、「それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受ける」ということです。それぞれが異なる働きをしています。大事なのは、自分を奉仕者として召した神ご自身から、その召しにどれほど忠実であったで報いを受けるということです。自分の奉仕について、キリスト者としての働きについて、どうしても自信が持てないことがあります。それは、他の人と比べてしまっているからです。他のキリスト者のように自分はしっかりやっていない、と劣等感を抱いてしまうのです。けれども、それぞれに走るべき道りがあるのです。それに集中する必要があります。パウロは、エペソの長老たちにこう言いました。「使 20:24 けれども、私が自分の走るべき道りを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

そして次に、自分たち働き人と、コリントにある教会との関係を、自分たちが同労者で、教会が神の畑だと言っています。ここが大事な関係です。教会は、神の教会ですから、人の助けは必要ない、といったらその通りです。神がその畑に生えているものを成長させてくださるのです。けれども、同時に、人が必要です。種を蒔いて、水を注ぎ、肥料を与えます。人には依存しないのですが、人

を用いて神はご自分の教会を建てられます。後に、御霊の賜物について 12 章で学びます。それぞれが、与えられた賜物を用いて、神に仕えるからこそ人々が建て上げられるのです。けれども、だからといって、「私がいなければ、この教会は成り立たない。」とするのも間違いです。恵みによって自分は教会にいるのです。いなくとも、神は他に人を立てられます。

3A 神の建物 10-18

そしてパウロは、教会が神の畑だけでなく、神の建物だと言っています。エペソ 4 章でも、教会をキリストのからだとして成長することを話していますが、同時に建物として、建て上げられるという言葉が使われています。ここでも、神の建物として教会を語っていきます。

1B 土台なるイエス・キリスト 10-11

¹⁰ 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。¹¹ だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

パウロが、十字架につけられたキリスト以外は知るまいと決めたということを、2 章で話していましたね。それは、ここで「賢い建築家」と自分のことを表現しています。人間の知恵に彼らが頼ることがないように、神のみに頼ることができるように気を付けながら語ったのでしょう。そのこと自体も、神の恵みによってできることです。

けれども、ここでパウロは、彼の後に来た多くの教師たち、またその教師たちに影響されたコリント人たちのことを意識しながら話しています。彼らは、パウロの働きを否定しながら自分のほうに引き寄せようとするのです。パウロは学がないとか、エルサレムから来ていないとか、そうやって自分はアポロ派だ、自分がペテロ派だとやっていくわけです。これ、危険だよ、というのがパウロの言っていることです。パウロは、パウロの知っている学問であるとか、人間的な知恵は使わなかったのです。荒削りのイエス・キリストの福音をもって教会を建てて行ったのです。

だから裏返すと、パウロの働きを否定することは、つまりは、イエス・キリスト以外のものの何か異質なもので建てて行かないといけないんですね。党派心を燃やすことによって、建築が土台はしっかりしていても、その後、継続した建築ではないので、出来ばえがヤバくなることは十分ありうるわけです。ここが党派を作ることの愚かさです。異なる人々が異なる働きを連続して行っていくことによって、初めて建てられる家なのだということを知る必要があります。

2B 試される各人の働き 12-15

¹² だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、¹³ それぞれの働きは明ら

かになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。

今日の午前礼拝でお話しましたが、表向きは繁栄しているような働きがあっても、その後、永続するかどうか問題になります。人間的な知恵であれば、それは木や草や藁のものです。後に残りません。感情に訴える部分で教会が建てられましたら、感情が去ればそれではなくなってしまいます。また知性にだけ訴えていれば、違う論理的にもっともな話が出てきたら、それで去ってしまいます。一見、すぐれた働きに見える、人が多く集まっているとか、活発であるとか、その働きがあっても、それでも試みを受けた時になくなってしまうのです。堅実に、霊によってのみ、初めて建て上げられます。霊のことば、神のことばによってのみ建て上げられます。

そして、「その日」であります、それが「火による裁き」です。教会も、神の裁きがあることを、ペテロが話しています（Ⅰペテロ 4:17）。今の時代にも試練がその働きをすでしょう。そして、終わりの日、主が戻って来られる時に、すべての教会の人々が火を通らされます。そして、人々には知られていない隠れたことも明らかにされます。真実に、キリストの愛に突き動かされたことだけ、神の恵みによって成し遂げたことだけが残ります。

¹⁴ だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。¹⁵ だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。

ここではっきりと分かりますが、信者の受ける火による裁きは罪に定められるものではありません。火といっても、燃やし尽くすものではなく、むしろ純化させる精錬する働きです。ですから、信仰の財産は、金銀、宝石のように火を通っても残っていて、それに従って報いを受けるのです。そして、これまでしてきたことが意味のないこと、木や藁、草のようなものであったとしても、自分自身は救われるのです。

3B 御霊の宿られる宮 16-17

¹⁶ あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。¹⁷ もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。

パウロは、教会が神の宮であることを話した後に、それが神の御霊が住んでおられる宮なのだということを話しています。これは画期的なことです。神が住まわれるというのは、聖書の創世記から黙示録までに貫かれている、大きなテーマです。神が共に住まわれるところはエデンの園だったのですが、そこから追放されて、人々は祭壇においていけにえを献げることによって、神を礼拝し、ついにイスラエルの民には、地上の幕屋の中に住まわれることを語られました。そして約束の

地に定住したら、エルサレムに神殿を建て、そこに御名を置くと言われました。

けれども、キリストご自身が世に来られ、十字架によって死なれ、そして神と人、天と地の隔てが取り壊されたのです。神殿の垂れ幕も、上から下に裂けました。そして主はよみがえられ、天に昇られてから御霊を彼らに注がれます。そして、御霊ご自身が彼らに留まり、エルサレムの神殿ではなく、体をもって集まるところに御霊が住まわれるようになったのです。そしてイエス様が再臨されたら、そのエルサレムの神殿にご自身が御座に着かれます。そして、新天新地では、天のエルサレムは神とキリストご自身の中に私たちが住むことになります。

そこで、パウロはかなり深刻だと思っています。このように、人間の知恵でもって教会のことをもてあそぶと言ったらいいでしょうか、教会を党派心でいっぱいにするならば、神は聖なる方ですから、神ご自身がそれを潰される、滅ぼされると言われるのです。それは、教会を守るためです。これは、コリントの人たちというよりも、その教師たちのことでしょう。またコリントの人たちも積極的に、この動きを推進されているなら、自分自身も、自分に与えられた信仰を潰しかねないと警告しているのです。教会について、人間的な知恵で、我が物顔で何かを操作できる、支配できると高ぶったら、神がその高ぶりに厳しく対処されます。

4A キリストにある特権 18-23

そこでパウロは、人間の知恵を軽々しく取り入れる者たちに対して、厳しい警告の言葉を投げかけます。

1B この世の知恵の愚かさ 18-20

¹⁸ だれも自分を欺いてはいけません。あなたがたの中に、自分はこの世で知恵のある者だと思う者がいたら、知恵のある者となるために愚かになりなさい。¹⁹ なぜなら、この世の知恵は神の御前では愚かだからです。「神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえる」と書かれており、²⁰ また、「主は、知恵のある者の思い計ることがいかに空しいかを、知っておられる」とも書かれています。

「だれも自分を欺いてはいけません。」と言っています。私たちは嘘をつくのは他者に対してだけだと思います。自分には嘘をつけないと思っています。けれども、実は自分を欺くことができるんですね。それは、思い込みと叫ぶ方がいいでしょうか、心を頑なに固めて、見えるものが見えなくすることができるのです。

ここでは、「この世で知恵のある者だと思う者」としていることです。以前、ご紹介しましたが、ある牧師が精神医療について生かじりの知識で、「悔い改めはいらない。薬があればいいんだ。」と強弁したことを紹介しました。世の人が見ても、すぐにわかります、愚かだということを。なぜならば、

世の中の人であっても、教会という宗教の人たちはその宗教の中に、世の中にはない高い価値観がある、少なくともそう信じている人々がいて、救われているのだらうと思っています。そして、精神医療についても、まだまだ発展段階で、試行錯誤を繰り返して、分かっているところと分かっていないところがあります。お薬については、本当に慎重に神経を使いながら処方しているはずですから、二重に過ちを犯しているのです。乱暴に、悔い改めはいらないと言ってしまうこと。そして薬を飲めばよいのだと言ってしまうことです。

パウロは、「愚かになりなさい」と言っていますが、これについては知らないままにする、神の領域だから、神にお任せするというようにしなさいということです。もしそこに手を出すならば、自分の知恵だと言っているものによって、自分をがんじがらめにしてしまいます。「彼ら自身の悪巧みによって捕らえる」ということです。さらに、これはいかに空しいか、実のないものなのかを説いています。主を恐れることこそが知恵と知識の始まりであり、教会はそこに徹すべきなのです。

2B すべてはあなたのもの 21-23

そして次に、驚くべきことをパウロは書いています。

²¹ ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。²² パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの、²³ あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです。

「すべては、あなたがたのものです。」ということです。コリントの人たちは、その逆を考えていたことでしょう。キリストのみだというから、狭いのだ。もっと広くなるために、他の知恵や知識が必要なのだとしていたことでしょう。けれども、真実はその反対なのです。彼らこそが、人間を中心に考えていて、すべてのものから学び取ることができるという広さを拒んでいたのです。教会というのは、とても狭いところだ。世の中の物を取り入れないといけなくとするならば、たちまち教会は狭い世界となります。逆にキリストこそが神の知恵であるとして、キリストに集中しているならば、そこには神の造られた宇宙の広がりを持っているのです。

人々には、こだわりがあります。捕らえられている部分があります。パウロ派の人たちには、勝手な自分たちの知識によって自分たちを縛っています。アポロ派も、ケファ派もしばっています。けれども、実は、それぞれが神のしもべであり、奉仕者なのです。神につながれているのであれば、それらがすべて自分の益になるのです。自分は同意できないと思っている人からも、実は、このことについて、神から教えられたということさえあります。

そして、「また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ」

と言っていますね。「世界」のことを人間の知識で知って行ったら、その考えに縛られるようになります。教会の中で、世直しをしようとして、社会正義であるといって世の運動と同じようなことをしている人たちがいますが、そこに限界があまりにもあり、行き詰ってしまうことは目に見えていても、次進んでしまうのです。しかし、キリストにおいては、その後も世界があることを知っています。だから、世界にあることで拘ることはないのです。

同じように、「いのち」についてもそうですね。「詩 63:3 あなたの恵みは、いのちにもまさるゆえ、私の唇は、あなたを賛美します。」今の命はとても大切ですが、神の恵みは命に優ります。それに囚われない生き方ができるんですね。もちろん、今のからだを大切にします。しかし、このからだを下さった神は、その後のいのちもくださっています。ですから、今のいのちのことにも拘りすぎず、縛られることがなくなるのです。同じように、「死」に拘る必要もありません。死への恐怖にとらわれる必要はありません。死ぬときは死ぬのです。神が決めておられますから。

それから、「現在のものであれ、未来のものであれ」とあります。人々はあまりにも、現在あるものにとらわれています。けれども、ソロモンが伝道者の書で言ったように、今あるものは、昔にもあったのです。そしてこれからも起こるのです。今、起こっていることに振り回されることはないのです。同じように、「未来のもの」とありますね。未来の予測など、いろんな人がします。一体、これからどうなっていくのだろうと心配して、その心配で今しなければいけないことが縛られる、ということがありますね。また、キリスト者の間では、「未来」だけに縛られている人もいますね。「天国に行くのだから、地上での生活には意味がない。」としてしまう。けれども、今、地上に残されているということは、神がそうされているのですから、意味があります。

このように、そのような広い世界が見えてくるのです。そしてそのように見えてくるのは、自分がしっかりとキリストにつながっているからです。「あなたがたはキリストのもの」と言っています。自分がキリストのものになっているからこそ、すべてが自分のものになるのです。キリストにある者という認識が強ければ強いだけ、党派や分類や区分けのようなものから自由になることができます。キリストは、すべてのすべての方ですから、あらゆるところにキリストを知る材料があります。だからパウロは、まず十字架につけられたキリストについて語りました。そして、御霊によって啓示される神の奥義について話しました。

そして最後に、「キリストは神のもの」と言っています。ここは、世界を見渡せば意見が分かれるでしょう。神については、神が世界を支配しているのはその通りだという人は、他宗教の人たちを含めて多くいると思います。しかし、神の選ばれた方はキリストなのです。キリストによってご自身を現し、キリストによって世界を支配しておられるのです。ですから、狭い門から入りなさいとイエス様は言われましたが、狭い門なのですが、実はその後は広い、平らな地なのです。